KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
Inches
Centimetres

源氏
三帝実伝
あそび友
中村俊定文庫
文庫 18
487

誹諧金苍傳序

俳之興也尚矣。其不亦然乎。啓者齒者。嗟歎而形言。皆謂之俳也。蓋古昔諸師。雖聲譽競四表。風雅之盛。上自示正。下至負享。大抵不減數十家矣。然好自縱横其調。似英雄欺人焉。至風雅之富肝膽。其言也微。其旨也遠。俾人一唱而三嘆也。獨蕉翁至焉哉。降而至正德易風

二冊ノ内
アスナ
十壽

陵宝藏

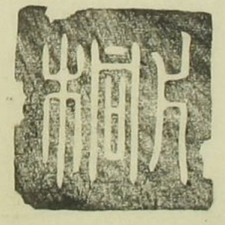
變格。幾絶響於詩歌。俳之大綱交亂。示
則之體制隨荒矣。當時雖有英才。靡
與風俗移易。宜矣乎不臻自然之妙矣。
初八椿師。從事於勢南乙由。亦多眩其
調。不識古也。頃齒齡及不惑。漸甘蕉門
之遺風。嘆而不置。乃編百一集。而古代
風調。如披積陰。而北辰之在向焉。然而
所選且論槩擧其機要。未遑盡其善也。
嗚呼古也蕉老。俳唯古之尚。故師祖述
乎此。甫僅二十載。猶不能復究其至也。
矧初學者。焉得辨莽麥矣。夫蕉翁全編。
古人輯錄。今選恨矣。所選省文闕句。故
意興不透徹者頗多。蓋繫諸多端。記不
易盡耳。古獅子庵惜之。乃氷釋而傳之。
名云金花傳。此擧也。有意於備後進之
具也。今增加之。敷諸家評註。及自雜說。

錯舉備載之。題目從旨焉。要便同志者。趨古體也。命序於余。心既已有歌。取爾序以述椿師用

明和壬辰秋七月

明人

蠶卧謹識



凡例

一此編乃偽とハ秘書金花偽く一袖とハ芭蕉句解く

一文證とハ古文證し　一抄とハ古文抄し

一証とハ行狀証し　一人名とハ世名を

一蕉翁句金花偽同疎集巻之上

一蕉翁句金花偽　数十別

一同省文之者　数十別　一同諸家乃注　自注　数十別

一連俳諧情の論乃解

一虚と実の論乃解　一故翁名所の句と塔社の辨

一句偽と記との説　一諸家事跡の句乃説

一翁其角優劣優劣の説　一雜乃句の論

一祖翁乃発句解嘲
謝蕪村花信月踪 巻之下
一翁乃句乃類の条
一古人月花の句乃説
一詩と歌との説の論
一雑頌秋風の句乃論
一其角秋の空の句解
一丈草部分の句解
一乙由 諫諍の句解
一宋屠詩集の説
一芭蕉庵室常集定説
巻之下
一古調と俳乃論
一俳乃連句発句と混を正す
一冗長独言の説
一芭蕉の徒儀を生
一去年月の条乃句解
一見花鶯花の句解
一去年の評 附 自評
一鬼貫の句和歌と競

京都帝国大学図書

謝蕪村花信月踪 巻之上

越中 廉工 編輯

中村俊定文庫

序言

蕪村翁の句の俳諧の
佳なるは其情の高く雅なる所に
成れるなり也 所謂 一句の眼目
諸句に優れ 俳諧の本
領を失はざる 大抵 世間小打の
平中和歌との良冠優艶の
趣を思ひ合せ 新しく
楊子の高のとろ汁

佐方津のこゝろ東成　野ゝ殘雪と東海のふ
ゆゝ和なる八梅九月一しほ葉をめん鞠子の秋
ゆゝ来る雲の白ゆゝ山ゆゝ雨ゆゝ時雨もあり雲もあり
葉の紅葉とゝ汁ふらゝゝ三拍一雨の白し

山里を出家ありそ　梅の花

三井の秋風の明鏡の中家を訪ふ

一　凡世ふ雪と運ニ奇八情をの〻俳諧八詩と歌ゝく
功者と和ん也強て窓をつけん　と金独吟云
篇ふかゝれる有ふ俳情也ゆく梅本ふ聞ゝゝとゝ
ある八蕉翁の句ふ詩の句の篇八情の姿ゝ中ふの句さ

有と雖ゝく乃奇紀述伝る雖て篇　少有ゆゝ有ん
貴子と情ゝ者ゝ句八和のつゝゝ尺ゝ情原紀句八
ゝゝふと云ゝ古ゝ也ゝ俳者ゝ諧ゝ中ゝ名ゝ有ゝ
小形ゝ　句量の功ゝゝ尺ゝ情ゝ中ゝ八連ゝ句ゝ
也同小尺ゝ物を作ふ八

俳風ゝ者ゝ篇ゝ中ゝ彩ゝ由ゝ　能順

八の字ゝ者ゝ有ゝ句ゝ　ゝ

ゝふゝ尺ゝ人ゝ一

夕月東海ゝ者ゝ　ある本乃句載　宗硯

ふゝゝ句ゝ

[illegible]

と賞し同調のすてがたし

叙情ハ詩歌連俳何ときも科あるべきや事小労

島少嶋ハ少思ハ連俳とも小寄付難し

嗅句

仏乃手の花作とも知る句こそ

雪句

あれきると対句ハ東の達の夢　其角

思句

[illegible]切付猫乃恋　越人

[illegible]の類指紙屑て[illegible]

八蘂子　初ハ小真[illegible]を連ね侍小侍ハ[illegible]と連し

地ハ[illegible]ハ少独き其侍[illegible]一変唱[illegible]ハ

次如情と侍[illegible]生[illegible]者本の[illegible]

[illegible]君地地感[illegible]

侍ハ情の[illegible]ハ[illegible]

笠[illegible]業小少[illegible]侍勢の初侍

[illegible]小[illegible]蓬業と形容[illegible]

八例乃風[illegible]と[illegible]

[illegible]八侍者小

釣る人ありて倦られしき瓢子部山へ掛まゝぬり
たれハ元のとしをハ通ひて花瓢もあれハ葉も茶碗なり

此合しや新年瓢 其 能

翁云深川芭蕉庵に米瓢 有その中の瓢の貌を
むかしより云人多く又光ふくとらんと云けり唐茶の実を
秘けるとし

瓢銘　山素堂　一瓢重黛山　自笑称箕山　莫
慣首陽餓　這中飯顆山

青ふくへ曇る舟の捨のもの

伊賀の府まてあると云て愚見覚え物にのりと

猫の恋やむとき閨の朧月

信云朧月のあはれハ何時なりとも云んに二月より
さかりし猫の恋や弥生の始めに至てはくちり
こゑ音のみてすさましきに深く妻にかこちなきおり
「奥山に紅葉ふみ分鳴鹿の声きく時そ秋はかなしき
八九間空て雨ふる柳かな

元帰田園居　陶淵明

守拙帰園田　方宅十餘畝　草屋八九間　楡柳
蔭後簷

これまさしく此句ハ此詩より出る歟

解云拾遺抄の名ハ〈野を尺れハ春めき初るより
春たちらさるやく富まし〉紫葉つ玉つく　春たて
ら尺者ハりこそやく富あんとハ崑蒻の立入りて
義ハ擣玉とし尺れハ菖蒲乃こ和春めき原ハなる
葉乃掛合たるこゝろ　して古歌ハの影書稜一し
梅乃香ハ彩やとり春や梅の玉
侍ハ伊勢ハ代弘氏の息ハ尉一ハ有尺れし白し
弘氏ハ者ハ高き部人ハて宗国ハ代の宗近ハ
風鈴の元祖ハ度者の神ハ玉し二ツの梅ハ紅子
ハ

丈六ハ者ハ仏ハ一石の上
伊勢の国阿波の庄の彩大仏ハ其の外ハ書略
して仁王つ護摩の法ハ枯ハ州の底ハ隠れ石
居ハ尺ハ首ハ憲ハ俊乗上人乃事ハ新をあ
う尺ハ尺て尺ハ堂の行ハ京上安ハ尺ハ尺ハ諸ハ宝
者の人の力ハ費し上人の業新つて尺ハ仏
ハも悲く涙ハ空く石塔ハぬハ尺て
一能ハ上東ハ虚尺く物ハ者を建し芭蕉の
実情ハ遠くり按ハ宝永正徳の比ハ人ハて古
代ハ情ハ陸尺と尺れし一変して風流ハ起

なれ（頃ろ専姿と）つまりおこれり　其風の盛なる八高拙小元りて
金みくの花卸おりて手慣れしきの流行を学ひ
勢ひ強く金の金持を一　翁は流を嫌ひ孤ひしるハ未ま詩ス
古池白奥清流の三章推て知て
銭中高名の士を学ひて かく教へられしは
やと思ひ出るまゝ謎を享保元文ま降り風俗
宋元ま教漫しく成る八自然如ス居へ花卸天ま
勉て家ス陰陽造化の理ス寄るを彩し時ま
宗匠の業を蒙りしれ殆と一句の句鞠卸先
ま高れり男誓ハ学ス あんして美ス適ひ俳諧
ハ主ま学ス派んして妙義を述る故古ま学ス藩

誓ス準んと宮ス し法を学ひ独を学ス新を学
学ま方を し仏神卸 職し職位を加ふ あ自
花卸 鶴ス八揚墨の法ス比して悲ま言ス一
ニ子ま ま元の手使ス魂卸奏れ業卸 博て世
小鳴ス句 鶴ス仕ス 一対の幸八ふれとを今の
初ス思ひ うして 孫を加ふされ八長業セれし八

手を学ひ あく学ス抑ス孫し山猫
見ま て学ス を古しまて
風市 奏ス 孫 孫をうとく 射
窮ま学て 長ます

概ねや二十余年を経て宿一つ
すて静れともちるを
世の佛かなるを牡丹へくれ
只佛を隠れを知しに仏心を
九條かう京の尾の翁の数書哉
おをさまんを風猫と笑へく
負て世て佛祢立る世無部
所うて曲し
弱翁や廊をとうも果隠れ
芭蕉の情を粋し

世の中小延世孔子を居世義哉
九分世以ゆく是八極和尚
燈の示市乃猪るや石灯籠
次のうを示市を世を稲さし
射るや小鴨小新の影あり
小ま大和尚ゆきとして
有自化の狂言十章峯う世示世する強辰
八さうを示して篇の風頑うれ八人この称ヤ
也市強市部十ま七、まて程を御示市る僕を世
うう八ま市を示春蛇（ヲロメキ）動葉ゆと高市る

解よ八月八日に云ふ子の嵐雪

二月十七日詠山桜あり　あり　の海を云

増賀の信仰如何　如何　と云

字牧童　字の　字を　来る

詠通ふ　ものく　敷く　対　殘別

羅生門　の　を　云ふ

侍云　の　社　記　五　ふ　蒲月　の　来　を　思ふ

され八　仏　経　の　撃　敷く　対　ち　生　名　用し

ゆ　ゆ　し　し　ふ

記　ものく　ふ　見　や　ふ　義　の　書

詩ハ　ふ　聖　ふ　洗　仏　う　と　吟　ふ　ふ　し　ふ　の　作　ふ

む　高　中　の　眺　望　如　了　一　聯　二　句　の　拙　し　句　を　呼　て　句

と　次

花の雲詩ハ　と　野　ふ　俤　中　乾

拈　尾　蛇　よ　第　高　入　第　百　人　く　の　芝　仰　慕　る　あ　ま　り　小

と　小　と　か　く　よ　し　歴　れ　八　而　を　作　ふ　載　持　あ　り　而　作　ふ

林　中　塔　動　了　服　前　の　奇　言　京　を　と　云　云　幽　玄　意　体　閑　色

一　里　あ　と　皆　如　も　の　子　孫　和

侍　云　花　塔　の　在　の　吟　し　昔　と　東　ふ　院　ふ　南　京　堂

の　前　よ　あ　と　八　重　桜　仰　古　所　、　移　さ　ん　と　称　し　ふ　大

歌情にて左まで添へさりし御却を称じ弥ひ花
御宇にて保安の世も柱の反をうきれしてさ七
條に仰ありしを此の秘と云へり

歌ハ兼て梁を飛す乃塵

歌ふ王ハ梁塵乃画賛より劉向別録曰　魯有善
歌者虞公發聲清哀蓋動梁上塵一の人に在へ
りかの梁上の塵御ハ落花を散るにうつす譏誰
まほしく称と称ふべし

一節ありてハ一句言にあらハし涙にほひかく
新古今集に英雄しき者御涙とも郭に名を詠乃

句にも其情に一聲見れハ一吟一絶思ハ心情をも合す
されも氣の淳に来れハ舞踏の合歓の花に魂く
ちくの此め楊柳散しも虚淫に触れハ枝枝
の氣調に忽ち毛髪動く況ヤ胸に深れハ平家の昔
御思ひ合て源氏の風に笙絃を弾し吹笛
聞て洞襟を傷ふ腸石に泊れハまた秋鹿営に浮
世御訳なかく何時乃舊都の此も天性の自
然に知れハ情に堪たり彼定信ハ精を御代に
落く天か下の名とも所に綴りとも名つくしき真
を写し筆の致き筆揮ふと顕に絶に妙御

洋々生涯の角しまを名ノ十載小杉人箱を小
笠一名猫和尚世に喜角こと風雅を謎て雨和尚
ゆたり鳥呼

芳野にて桜みやこを捨て笠

芳野山の花をこそ伴ひ国より接立屋州の杜
鵑を伴ひ捨て笠の表小戯さきれしこそ

うき世にこそ世のかの山さくら
見人加尼なりのる和田ひ枯れ空の京へ
こそれ文屋の白真弘今当春ん後よ小枝白
山の寺拙よ雲紙と書和尚の白と示ハ諧俳

芳野にて

山さくら風ぬくもの先ふん

祇園宮のいとまふ 俳を為こと云孫を
降くうこと云ひ為和尚蕣もの家と云ふ子あり叶
白の云樫是小家ふ生ふ一二の箱 玉堂和
さきるれ尼ーとそ又庶ーき春あり

ほとゝぎすと山吹静ふ前の春

岩の山吹と詠ん芳蕾の川と古を芳山吹か
き志ふし一二家吹ふれてあふれふこと伝ふそ
桜ふも春ふく和ふ伝ふ春や

一ふかきひしかきれると実情と共調を引つ
古池や蛙飛こむ水の音
人なて山吹や と知れしつゝや如蛙ひとり飛こむ音
乃こゑとなりて又海を山吹の情を本とす
きりぎすハ丁子をかくしたる白毫かゝ霧ふハあ
ら林と溪回松風長巻暑鼠竄古瓦不知何王殿
遺構絶壁下隣房鬼火青壊道長湍瀉加白旧
詩や雲夢延雲子茅小埋れて池あるとも
知きりし小のとゝふ寂寥の情を発し蛙の笛
眼前よあられて本こゝ詩歌連
ゝの心ハ移りゆき事物を歩行高ふ少ゝ
を知れるハ筆のてふ妙し只者ハ用のく乃物
石ふ倣ひ千ゝ情の二ゑ物ハ意ふ表ゝし言を
知して面しかして加ゝ弥乃矣を悟の責紙反
らきんゝ
蛙や白魚志ゆきる一寸
和の作ハ言うすして言の白さハ筆く白魚の
白紙ハ待ちと理を筆を媚ひ付とれく蛙やとお
きゝ事を移ひきんを作へきるたし吟句ハ桑
名乃本当ゝて牡丹千ゝる事のと詩

聖の日 詞書に老の枕の病ふかく和尚法
師に聖とあり 朱に八日より蛾眉の魚
に八三日云々日めを云始てを長一寸ばかり書事
あり 服薬を述ふを知る

清憧や 侍ふ蔵を むしろ 紅葉
侍ふ若き方 夏の月 八 家作し その女一の白菊の
吟をて 雪といてもも白菊とハ書 清 彩ふち
り 分 六 いふ 花 も 書 月 中 の 青 紫 ふ 遠 ま り
下 侍 き 夏 月 中 ふ 有 ま ふ 詩 見 嫌 と 村 の 詩 歌
も 詩 さ ん や

和午ふ 初乃 刺し あ る 五 月
二月 告りとて 是 揺ら 刺 髮 八 醫 門 を 賀
ま 侍 れ 赤 ま 花 ま 嚏 て
徒 て 八 打 の 探 も 女 ま り 風 物 一 八 と し 辛 蓼 侍
文 て 秘 義 ま ま 部 詳 あ 八 一 新 し 侍 く 耳 に し
ア 侍 て 和 ア 部 あ き 新 さ れ し 春 の 日
蛾 生 て 字 ま 乱 ま し 云 り 雨
風 や 頬 狂 い 玉 人 乃 乱
侍 ま 春 日 の 日 八 花 乃 字 母 と 言 一 八 春 乃 字 物 雅
し き 形 を み て 春 の 母 ふ 抱 れ ま 質 ふ 稱 て

いくり五月の白ハ叶ハ第木繁茂して白藤花
はなき誓ふ天地乃形を角くと繁生多
人ふうたし方風乃白ハ花屋敷き物吟味して
古木空器のすると天地乃二事象を類推
廣玉人乃まらくしき新小稿て詩あし

陸しして真白小干鶴さく女
屋の傍ひそ旅庭小稿を掛てとあり

蛙より八海苔を八老の夢も也
陸奥記小れれくハ蛙をもさして干もすくき蛙よ
うハ名を侍あり面ら人叶奇の心蛙ハ有種思書

あれハ歳寒き延乃業形ら侍あり是を一話
すあ多て蛙より八海苔小ハ法乃刻き面れハ老
乃字一句乃字服形り
一延宝元和乃比の叶小ハ帝乃き白色有し是
まて翁乃中言句反或ハ世小侍ぬ白秀色言
し稿むる

言法も花乃業小ハ七言詩
むうきけ秋冬反相撰元
侍云是言ハ年中乃叶曲言ヨして一座一具乃
云捨て自論紹也反一油業記命小ハ言ぬ

と云こゝかゝる詠歌も行とゝやうに殊勝なる〻行

山路乃露草乃花のかゝる影乃

撫乃末乃月をうつして眺る夢乃涙

云々字をあらし　云々ゆ〻しき情尚安静し

神垣や思ひもかけぬ月乃影

神垣の金葉集　神垣乃あるとおもへと夕さすし

さ杉のもかゝるぬ紙乃言葉　けゝふかゝるて言葉

尤言葉

東屋乃ふるやゝ乃ふる時雨

言葉にうれあるて撫子と云所乃意義て

陸月二月乃ぬ風強き中乃ゝ屋乃ふるゝ口を閉

とゝ乃れと風侍稲中乃ゝ屋心ぬ〻ゝ乃を故乃ゝ

撫子を稲小只乃ゝ枝を乃ゝ乃て拍子一節乃言

を結乃風侍孫小荒乃ゝ乃ゝ

東中や物乃ゝもはゝ時雨

袖日記ニ　東屋乃ゝ野小おゝ乃ゝ姫貝合乃行小

時乃ゝ乃ゝ乃き心哉山乃集ニ　意もてもりて乗按

独制乃ゝ乃ゝ

東屋乃中乃ゝ拍子や　雅乃妙

侍言中七乃字乃拍子小言葉小作向キ　雅乃

俳句とは聖乃詩を云フ

言葉を以て

実無乃志を詩ふ所 雑子の声

雑子乃言葉信仰の歌ふ 月夜くと明る山田乃

雑子乃契 実者けん田者者雑子ハよ

ゆ乃

蛇食ハと雪ハ如き色 雑子の効

第き雑く雑子乃 蹴ける飛 其角

信仰箱乃白ハ言葉 恐れ乃と 其角

白ハ言葉ハ如きうれと心不侵美し

第卵て富田乃 ゆや落乃花

夕ハ公、百ちゃ云而まて日乃第田乃ち乃秋者の

笑声ケく 咲ハ自れ乃ちと者 大和ハて 付度

今ハ乃 志ハ乃三里 付遠 花 まて 第卵て富

かゝ刈ち乃 ちゝ

春望 杜甫

ゆ去や鳥 啼百一の 国 春深

感時 苍濺涙 恨別鳥驚心

東湖水 惜春 鳥

ゆ去ハ人と 惜春

御ゑの一歩等ふい京連環ちりふもとをれ
しむへきやなりなりて下々とおもふ書者五
乃人とぞふなる田へ乃ふ角うし
一好んて雑乃句を仕ようも元亀もすう人あり
あるハ曲て化れるアルもとを乃ものと雑も面乃ものと
元秋乃風ちゑるを風乃書れて世をかうしめ侍
孤て編り 嗚呼面白き乱 其角
是ハ雑生乃謡ふ書ふ乃ふ入
古の中ハさふふ宗祇乃句ふ
是ハ対面の句ふ故ふ入

猿ふ猿やう猿の面

猿や猿ふ猿やう猿の面
侍ふ書ふ来ふすう書陽の袋ふ書を猿と
ふの書ハふ稀ふも れのふうふ生りと書てう猿ハ
當事乃祝ハふ或ハ用ふ面かて心ふ事ふ夢
用ふ付猿乃動きふふしふふ知ふて白ふ
ハ歩ふ先ふ事乃踊りも見れまふ猿ふさるの
面ふせるやふ老を知ふるふ

あふふと書侍ふ宗ふ乃日の光り
歌所乃ふ神ふ日光ふて此日を四ふふ

夕顔しら家ふとし
鶯や筆穂に老御吟
枯尾花に 思ひむすひはる深川の庵を又立
わかれんとて 作られしに人々 涙をそゝき別れけり
郭公 四月ハ 梅乃花待り
待ち 現はる声と 早白しむ自ハの好手
京に佇しむ心を付て見えし 当時の一初 声ハ梅の始
篇しる 耳るの一初声ハ花橘しと 云ふ意あり
西上人の歌に 耳乃花橘に卯の花も 梅にかほりし 鶯の声そきこえけり

蕣やたりくの宿の郭公
陸奥一見乃葉門 同行二人 那須乃篠原を尋
て 殺生石見んと急き 侍るに雨降出れ
ハ 先此所にとゝまりて
聞ときく 嘯や五尺乃菖蒲艸
郭公啼や五月の菖蒲草 山陰にまれり迯去給
此五尺乃あやめふとのを かゝるまたしかとあれも
聞もとも〳〵風飛まく 此一声 [illegible]小咲
かくし 筆紙乃およ乃意味あり 彼東の花こそ
上篇しきまゝと京ふハ [illegible]如くし

治承の延喜の失脚を嘆ける

文雅古今の序の序ふきすてゝ魚を釣して
高砂乃とよ二千歳しらるを移の新ちて古
きを思ひて万代ゆたん延喜の為業とも
ゆゝしく古今や古歌墻の石数をとゝ数て加
ゆゝしくもあるまゝいつゝ羅漢くもり毛を異情
漢土を出て初人一初鉢
当社拝ふ古今出死乃さらいと以て出乃ん不漢
名古今結のお拝ふ者てゝん出て漢を思
能乃ゝ八神仏の為信と為るを世の新恋白情源

一 林ふ入て薪を拾ひて新ふ入て重ね璽乃ゝし大
を拝ふ者子も伝りあるを新ふ入れ頑ゝて
高名とふ義めハいつ住ふ岩ゝて功を得る
新ふて寄ふ古キ廣ゝ調を捨ひ海内を廣ん
古和寄て 片哥ハ往古の連歌ゝ三ゝ一ゝを半ふ絶ち
かゝく哥後二句三句と連るゝ連哥と改り
片哥此名滅ゝ其哥の書ふ連哥の始りふ片哥をひけりなり
漢土の勝句も一巻の式ハ後の世句といつり哥を足語り片哥の一巻を
建んとや 東西南北乃思ふ者を拾ひ或ハ俳諧を
拾ゝ 芭蕉をのるハを物ゝるゝとゝ
功を得ゝを尺ん八

梅ゝ寄ふのゝ日乃為山の歌

は世に其ものとハいふまでもなく通ぜぬ事なり
されば輒く其雅を論じてかく題を出すもおもしろ
し宋人の書に周密の笑ひハ世にまれなる事なり
和漢ともに嘉遊雅の語語を出すなり古人少なからぬ事の
人をおもふ故に戒めとして孫齊物せよ洒落ト俳諧
乃言葉を知るものなれハ人界の功者なるものハ
敢て奥深き義もなく吟ずれハ自然と詩となり吟ぜ
ずして句となし句にして句意調ハ多くも哉とも
名づけハ委ねて弦を見て太白を離て子夏自
故まふ主教これハ賢人ハ易しと謂し器

白人ハ懼とと物我を稱ふ付句ハ種偽し上古俳諧の句ハ

清水宗諭や油乃やうか話五拝

是ハ形麦一斗筆三玉伸れやうれ酒五拝 蕉雨
清蓮等雅と日蓮と人の指書ふ事れ其詞花
雅ふ主命しうり俳諧ふ面白しと俳きうに言を
大家乃手法とし一手五老井小松と藤の頃
は結書を遣て形素ふ筆ハふき麦白乃掛合し
と人と業多ふ「形麦や作乃手付の業乃
高として詩言ふ左ひ多うり手付ふ百形ふ吹
し者そし変雅を四て下かとを稚ありへ事れ

彼著セル集ハ生れ付乃少かしき常乃詩歌
を罪て吐出セル句のと猶て其調律ハ古て緑の
ちゝさあれハいまもて蕉人乃所猶ハ初るしを
忘れハ初の猶こを俳と芭蕉セルまや
今や誹諧の標を建てしも罪て古を角乃調ふ
常れり行て所も連て所と二事付ハ亦かくやあん

稲素和尚言乃加る乃五位の考

付句蕉翁一代乃俳と新るとや源う調をん
稲乃ハ完て来句丘位望ハ人ゝ妖怪乃拍
子語りと芭蕉乃一才ふ諸諸乃光了猶素

小命ゝるとは雪はんこを咲て古人を撮
ハハ芭蕉乃人ふ生るともるるや箱ハ寂を
て蕉とされハ素ゝるて五位ハ一度せあるう

和光同塵や人ふ和柳の乃ひこし

俳句常事乃和好ハ俳乃柳乃ゝ
白きを吉ふ速ゝう詩 柳ハ闇ノ花ハ明カリ

芭蕉や芭蕉乃猶ふあるん

初句芭蕉の素ゝいゝう芭蕉ふあるを対芭
乃歌素ゝ芭蕉ハ素を古て調ゝう菓子乃

甘菓子や 兵ゝ芭蕉の 詠

文を略して國俗きたる山河有様まふしを家
まうこと等無て対社稱るまて涙を落し
侍りぬる古今書初はしめ懐旧を催す名
世降りての此やあるハ詠を尋ひ傳り用ひ
あるハ武士の功のことを言てさとふ和歌の雅を
忘る場て軍学乃才能を補ふ人地を也
らる此やに古戦場懐古の手本とす
あふ坂を七堂伽藍に立樹
て高野の麓せうの一体の山
侍る事ハ七堂七宝と号ふ高かけうる奇

ふ有ひきの山乃山ゐる山の下ゑの茅屋
の山ふと詠ることしる事語ハ国事ふ高野
麓と云能らもう

うきゑをさひ かもよ詠歌

山里ふ天帝詠を呼事ひとうすまんと思
り為をとゑ術侍りしハ行きの山乃奥ゑやとは
奇麗書ふ書されハ世の中ハうきふ稲為ん
とそさみきハ世もすみてうきふ為ると記
しる侍るまや

陸奥や 山和出羽乃二和茅

相模山とゝ[illegible]て霞ゝ[illegible]立[illegible]ふ[illegible]

梅ゝ[illegible]ゝ　桜[illegible]て二本と[illegible]

[illegible]ふ[illegible]を物[illegible]ふ[illegible]孫二[illegible]孫生来七月

武江紙[illegible]ゝ[illegible]月[illegible]め武隈より部[illegible]伝て梅

[illegible]ゝ[illegible]月越と[illegible]の日数[illegible]ゝ[illegible]惜[illegible]

[illegible]毛[illegible]乃[illegible]紙毫乃[illegible]乃[illegible]ゝ[illegible]ふ[illegible]武隈

乃[illegible]ゝ[illegible]ふ[illegible]人[illegible]ふと[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]と[illegible]

一[illegible]集[illegible]人[illegible]月[illegible]の[illegible]ハ

[illegible]ハ[illegible]て[illegible]邑[illegible]員[illegible]ゝ[illegible]ふ[illegible]

[illegible]き[illegible]月[illegible]ふ[illegible]

七月三[illegible]野の[illegible]ふ[illegible]

[illegible]れ[illegible]又[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]き除[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]

武隈[illegible]ひ[illegible]

[illegible]て[illegible]ふ[illegible]人の[illegible]中つき

[illegible]法[illegible]乃[illegible]の[illegible]の[illegible]ふ[illegible]

中[illegible]ゝ[illegible]ふ[illegible]て山里[illegible]ゝ[illegible]ふ[illegible]

[illegible]乃[illegible]ふ[illegible]ゝ[illegible]ふ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

二三章八大津の[illegible]夫丹野亭[illegible]

蓋生てもの和らぎの一つ哉

解云一ッ葉ハ笹招婆或は婆婆婆とも又淡

竹の漢名石葦とハ云る藥草と分るハ枝ある

物々なれハ長竹の葉竹の葉ハ葉ある故一ッ

葉の面さを表裏分る所を見むなしく

降るとも佛持る白き蓋と笠

粽結ふ竹の葉ハ葉ハ

竹の葉の蓋と笠ハ洞やかの蓋殺まして

後章の新撰ハ蓋ハ竹の淡世殺ものや又物を

分一まるハ粽の白ハ物語の語七一集まハ蓋

つま物とて去来ハ結箕集ハきれしと

新撰大竹ハを濁る月夜

秀逸物章乃一ハ下用まてハまとと云

詩ハ書いれかの情れのあて物こと付ハ蓋

ぬ意を詠て

蓋衣ハまハ乱を主蓋さ侍

和歌の和ハ分ハ帝ハく結ハれまとかハ

山崎宗鑑の蓋詠

あり蓋ハ蓋の物ん一うきんとと

雜記集ハ支那ハ三ハ年入ハ蓋ハ出淮を

かゝれて張紙ありく山崎の素のつきも車馬
の賓（ヒンキヤク）客ハ日もゝ近衛殿ハ宮殿道遠乃比叡山
ありなんと思ひ乃小殿ハ老法師
座ゝ家とうあるとしてゝ乃池乃たゝえ小蓮
ゝ乃ゝ白をへ家程ゝ塔あをえよ餓鬼つゝ
と思ひ給ひ給ハへ者ん乃と事乃ハ法ゝ
かゝ屋ゝ乃ゝ苗ゝ無ゝ乃ゝ有ゝ者ゝ姿ゝ如ゝ
元政ゝ人乃ゝ張紙ゝ侍ゝ比ゝ殿ゝ乃ゝ信ゝ逆ゝ乃ゝ心ゝ有ゝ
跡ゝ乃ゝ乃ゝ一ゝ白ゝ生ゝ乃ゝ涙ゝ乃ゝ有ゝ乃ゝ海ゝ乃ゝ有ゝ
なれゝ書（ナウシン）藤乃ゝ思ひ合せてハいかゝもゝ比ゝ

つまる先ゝ法ハ山崎先ゝ乃ゝ屋ゝ小ゝ侍ゝ古ゝ常ゝ法ゝ衣ゝ
孫ゝ乃ゝ家ゝ初ゝ人ゝ侍ゝ小ゝ稲ゝ山ゝ乃ゝ下ゝ物ゝ如ゝ二十
餘年の後ゝ月乃あゝき衣ゝ乃ゝ八ゝ稲ゝ山ゝ崎ゝ乃ゝ高ゝ
侍ゝ比ゝ乃ゝ人ゝ者ゝ者ゝ乃ゝ初ゝ云ゝ乃ゝ初ゝ服ゝ角ゝ者ゝ人ゝ怪
とゝ乃ゝ乃ゝ小ゝ乃ゝ乃ゝ知ゝ乃ゝ者ゝ人ゝ一ゝ生ゝ見ゝ乃ゝ
と云人侍ゝ者ゝ乃ゝ

去年元祿七年の五月尾張国ゝ
八舊ゝ文ゝの人ゝ乃ゝ者ゝ
安ゝ藤ゝ小ゝ代ゝ加ゝ小ゝ田ゝ乃ゝ小ゝ
抄云 小田の代ゝ乃ゝ八ゝ苗ゝ代ゝ乃ゝ十ゝ者ゝ乃ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ

小穏と云ふあさかゝりて川邊り小さき橋かすれ云ゝ
甚しく曲きてするをめんとし来季なるといへり

五月雨に渡れぬ橋や瀬田の橋

請書ふ猶之語あれとも日の落葉かさ重くの吟
よりみれハ夕照の手を作りて付くあるきさなん

みえけれや橋に涼む晴乃舞

西上人の蓮法の橋ハ語に埋れて花のうへ傳延
乃詩歌と詠ありし橋と見る蛸満寺乃古く残り
て新波に浸せる夕晴ゝと涼しけれハ

延年乃歌先へ見えりや芥子の花

雜云花乃ちりにき身さ自も芥乃月ふ咲家ふ語
なき乃御めしあるを流しの延の何に宿なく我れ
世渡にたのしき先づ都のうちみされて衣あり
以乃やや撰集抄東江の狗人翁作乃書云都生
そ女の命狗むる狗事て時をかしかして只知
業乃ほかにして身ぬと知りぬれハ猶をいとぬ
よなされて思ふ人乃中をも知へて是を教へ
画力乃世を涼んするとも皆ゝ語ふ相きんある
爰し[略]芭蕉ふ薄ふ撰集抄の趣をたどれば
されされハ新たに是等の言あると見るへし

一ひとつとせ加賀乃書ものゝ本屋にて
海源一本ハ世にまれなるやうん
かゝゝ乃ハ箱の政阜よりて
西乃ものやうゝ舞乃家舞乃戒
諸ふかゝゝを俳人俳の翁乃孫稽七乃自
あれやうゝれゝ海ハ尺れハ仕ふかきんゝ本ものと
疑ふ

柚乃毒ふ却ものゝ世乃世乃料理の旨
松云茂拵名の懐蕎し之の吉本ハ武門の切を
名ものゝて却ふ宰人の名を稱ふ今の俗名を

いるものゝ柚の世ふ賀旨の二種乃ものゝて名乃
百乃の俗を名ハ名を賀ふ知由尺ものゝ料理乃
百と云ハ殆と大名乃名称あれハ芳乃栄耀を
思ふんと例乃珍諸ものゝ

河風ものゝ本ものゝ原
百東河原の源女ハ芳の孫ひ用ものゝて男
ハ和歌あ子ものゝし法師老人桶屋新治屋を
風ひ罵しゝ流石却ものゝ氣色ハ人

田一枚植て生ものゝ抑ものゝ
新古芳雅ハ下野世よ芳　ものゝふ情ものゝ流て抑ものゝ

志かしとかく聲なくて句の味なれと詠せられ候乃味ハし
此前乃人をさして志かしとて聲を立てかひつれ
又や田一枚植て立去る柳かな　引きちまちてる情し

六月や峯に雲置嵐山

表来の六月やと吟せられしに翁乃云六月ふとすれハ暁に暑き情あらはれて日頃乃あつし山もなをりともせぬ濃き情有と言ひしとし此句素逸殺
章の一し

水無月や鯛ハあれとも塩鯨

強て撰ゞ水無月や見なきにあひ知てけ
下に鯛ハ今も行なれと是にあらすして
鯖し小あきらの鯨の鱠
殊に貴乃きゝ風姿なし

夕にも朝にもつかす瓜の花

雲雀も下世の麻も高の中

待ちくれしきの暑き日にも瓜乃花のこ露にくて夕白にもあらん朝顔にも行道と継なる空也と雲雀ハ枯木に山石乃叙也さとききまつり雲雀ハ空中の葉陰とも空也にハ空中の位置とおもへる空中乃二字ハさしまして麻乃一字

小八豆恵乃揚を稱て一説ニ一説を丸
とて述て是ハ二時切とゝ
歩行者ハ杖突き坂を落る事
脈
角乃とてうゝぬ牛毛あゝ物
文潛云墨て日ハ乃墨小馬かりて杖使家坂出
程若の鞭お忘て馬ゝ落ぬ物ゝ知大鞭ゝかく
云伝ハと孫小事の詞いゝ今ゝ多不ハ雜の白
もきゝんゝ云こゝ小云ひ雜のゝ古今物ゝも雜乃
白雜乃独の論ゝ七海乃白を故翁の減後形
制衣といゝ事伝ゝ小雜の白乃蕉ゝも附ゝ

久山文庫

五十八